

ブラタモリは IP のカタマリだった！

大堀 健司（エコツアーふくみみ）

キーワード：ブラタモリ、NHK、番組制作

1. はじめに

NHK の「ブラタモリ」は、タレントのタモリさんがブラブラ歩きながら知られざる街の歴史や人々の暮らしに迫り、話題の出来事や街に残された様々な痕跡に出会いながら、街の新たな魅力や歴史・文化などを再発見する番組である。発表者である私は 2022 年 1 月 22 日放送の石垣島編と 29 日放送の竹富島編の企画段階から参画し、竹富島編に案内人として出演した。その番組作りにはインタープリテーションが駆使されており感銘を受けたので、その様子を報告する。

2. 石垣島編・竹富島編

ディレクターの方から連絡があったのは 2021 年初め頃。石垣島と竹富島でそれぞれ番組を作れないかと準備をしている過程で私が 2012 年に竹富島の NPO の依頼で作成した自然観察プログラム「島つくりの神と島の成り立ち」が目にとまったという。そして番組の構成を考える手伝いをする事となり、その番組作りに触れ「これはインタープリテーションじゃないか!？」という場面に幾度も遭遇した。ちなみに担当のディレクターによると「インタープリテーションという言葉は聞いたことがあるが、そのことを意識して番組作りはしたことはない」とのことであった。

3. 番組の構成

ブラタモリでは、番組冒頭に提示される「お題」に対して、タモリさんとアナウンサーの二人が街歩きの過程で遭遇する様々な事象から、お題が示すその地域の物語を解き明かしていく番組構成となっている。タモリさんが感想を言いエンディングとなる。このような番組の構成自体がインタープリテーション的であり、制作側が伝えたいメッセージは制作サイドからは視聴者には伝えられず、物語を体験したタモリさんの感想として導き出される仕組みとなっている。

ディレクター曰く「ブラタモリはあくまで街歩きのエンターテイメント番組であり、単なる社会科見学にはいけない」そうだ。現地のコーディネーター側としては珍しいと思えるものやその地域が大切にしているものなどを提案しがちになるのだが、それだけでは決して首を縦に振らず、多くの人が見逃してしまうそれほど特別ではない事象の奥に何らかのメッセージを見出してストーリーを作り上げている感じが感じられた。

4. 番組作り

新しい企画は数社の番組制作会社（数人程度の小さな会社のような）によるコンペ形式で決定されるそうである。企画が通ると準備に数カ月をかけ、担当となったディレクターが現地に数週間滞在して情報収集し企画を練り上げていく。

そして NHK での会議を経て台本が完成し、下見、リハーサル、撮影本番という流れとなる。

驚いたのは撮影時には担当外の他の制作会社のスタッフたちが協力して裏方を支えていたことであった。番組にたびたび登場する黒子は彼らがその役を担っている。ライバルとして競い合いながら信頼できるチームとしても機能する、その仕組みがよい番組作りにつながっていることを強く感じた。

5. リハーサル

リハーサルは本番の数日前に行われた。台本通りの流れで出演者の立ち位置やカメラ位置などを確認していく。私のような案内人としての出演者にも台本は渡されるが、セリフを覚える必要はないと伝えられ、基本的にディレクターの持つカンペを利用する。その様子は番組にもたびたび写っている。台本や番組中に利用するボードは事前に何度も私宛に送られてきて、協議し修正を重ねた。

リハーサル時はタモリさんとアナウンサーはおらず、詳細を伝えられていない番組スタッフが代役となる。タモリさんならきっこう反応するかもしれないなどその都度話し合っ て台本をさらに修正していた。

6. 撮影本番

撮影当日、タモリさんとアナウンサーは何も知らされずどこに行くのかも伝えられず現場にやってくる。もちろん台本は渡されていない。観光地によくある案内板はすべて隠されている。撮影は放送時の流れ通りに撮影され、天気も気にせず一発撮りで行われる。撮影スタッフはタモリさんを驚かせたり面白がったりさせることに全力を注ぐ。タモリさんは現地で見聞きする情報を経て最後の感想を言う。この部分は台本にも書かれていない。タモリさんの口からスタッフが想定したような言葉が出れば成功である。たびたび予想以上の感想を得られることもあるようである。

撮影の様子を見てみると、スタッフはタモリさんのことだけを見て、気にして、対象としているように見えてくる。しかし、入念に準備した上で一発勝負の撮影を行い、それをさらに編集にかけて最終的に作り上げた番組が、視聴者をタモリさんやアナウンサーに自分を重ねて番組に没入させることになるのであろう。タモリさん一人に仕掛けたインタープリテーションがテレビの向こうの多くの人に拡散するように届いていく。ブラタモリは壮大な IP の現場なのであった。

参考文献

1) 尾関憲一著、『時代をつかむ！ブラブラ仕事術』フォレスト出版